雀離浮図の名について

定　方　晟

雀離浮図（じゃくりふと）はパキスタンのペシャワール市にあつて、西紀六世紀ごろ中国でよく知られた仏塔である。この有名な「雀離」の名が何を意味するかについて諸説がある。本論文はそれらに加えて新たな一説を提出し、諸賢の検討に委ねようとするものである。「浮図」はstūpaの音訳とされており、これについては触れない。

まず、古い時代の文献で、雀離浮図に言及するものをみてみよう。西紀四〇二年ごろ弗楼沙国（ペシャワール）を訪れた法顕は罽賓伽王（カニシカ）が天帝釈の化作した牧牛小児の造塔に触発されて、高さ四十余丈の、閻浮提第一の塔をつくつたことを記録している。[1] 小児の塔は大塔の下に埋れたが、大塔完成後に、その南隅に三尺許りの姿を表わしたという。法顕の記録には大塔の名が記されていないが、これが次にのべる洛陽伽藍記の雀離浮図に相当することは両文献の内容を比較することによつて明かである。

洛陽伽藍記には西紀五二〇年に乾陀羅城（ガンダーラ）を訪れた宋雲および恵生のもたらした報告が記載されている。[2] それによると、城の東南七里に雀離浮図があつた。高さは四百尺であつたが、鉄柱の先端までは七百尺あつた。これは迦尼色迦王が四童子のつくつた高さ三尺の牛糞塔を籠めるように造つたものであるが、塔完成後にその南三歩に糞塔がもとの如く現われた。宋雲は雀離浮図の清掃のため二人の奴婢を残し、恵生は良匠に金を払つて銅に雀離浮図の図を摸写させた。

洛陽伽藍記の雀離浮図に関する記事は北魏僧恵生使西域記にも簡略化された形で記載されている。[3]

雀離浮図の名は中国の正史の一つである北史にも出るが、[4]「東南七里」、「高七十丈」、「周囲三百歩」などの語があり、洛陽伽藍記によつたらしいことがわかる。

ちなみに、北史は南北朝時代の北朝（魏から隋まで）の歴史を記録したもので、六五九年完成といわれる。その巻五十一の初めの叡なる人物の伝記の中に、叡が殺された場所とし

て雀離仏院という名が出てくる。この記事は六三六年完成（ただし当該箇所は北宋以後の補綴）の北斉書巻十三に再録されている。これによって、叡が殺された五七〇年ころ洛陽に雀離の名を冠する仏院があったことがわかるが、その名はペシャワールの塔の名を真似たものであろう。

ペシャワール以外の仏教建造物で雀離の名を冠するものはクチャにも存在した。水経注巻二に「釈氏西域記によると（クチャ）国の北四十里の山上に雀離大清浄という寺がある」と記されている。釈氏西域記というのが道安の西域志のことならば、道安の死（三八五年）以前にクチャに雀離という名の寺があったことになる。少くとも水経注の著者酈道元の死（五二七年）以前にその名の寺があったことは認めてよいだろう。実際、羅什（四一三死）の伝記にも「雀梨大寺」が出てくる。僧祐（五一八死）の出三蔵記集によると、羅什をみごもった母親が雀梨大寺に赴いて経を聴いたというのである。この記事は慧皎の梁高僧伝（五一九完成）にもある。西紀二世紀のカニシカ王の有名な塔に触発されて、三世紀か四世紀にクチャに同じ名をもつ仏教建築物がたてられたことは十分考えられる。ちなみに七世紀前半にクチャを訪れた玄奘が「昭怙釐」という名で記している伽藍も同じものをさすらしい。

ペシャワールの雀離浮図に話しをもどすと、宋雲、恵生以後にもこの仏塔を訪ねた中国巡礼僧はいたのに、もはやその記録に雀離の名は現われない。ただこの塔がカニシカ王によって建てられたものであるということだけは異口同音に述べられている。ここではこの種の文献を列挙するだけにとどめよう。

大唐西域記、巻二（大正51、八七九中以下）
大慈恩寺三蔵法師伝、巻二（大正50、二三〇上以下）
続高僧伝、巻四（大正50、四四八下）
法苑珠林、巻三八（大正53、五八九上）
義浄訳「根本説一切有部毘奈耶」、薬事（大正24、四一中）
釈迦方志（大正51、九五四下）
往五天竺国伝（大正51、九七七中）
悟空入竺記（大正51、九八〇上）

漢文文献以外にもカニシカ塔への言及がある。ソグド語のĀryāvalokiteśvara bodhisattva mahāsattva 100 aśt nām sūtra という経典に akanišk astūp ßarxār（=Kanishka's stūpa and vihāra）とある。[5] コータン・サカ語の写本ではカニシカ王が四童子の予言をきいて、寺塔を造ったことが記されている。寺塔の名は「カニシカのヴィハーラ」（Kāṇai'ska vyahāra）または「カニシカの塔と伽藍」（kaṇai'ska sthūpa sakhāra）である。[6] 十世紀のイスラムの学者アル・ビールーニは「プルシャーワル」（=ペシャワール）の「ヴィハーラ」を「カニシカの

チャイティヤ」と呼んでいる。[7]

ほかにも雀離の名をあげる文献があるが、それは必ずしもペシャワールのそれを指したものではない。雑譬喩経（大正4、五二二下）と衆経撰雑譬喩（大正4、五三五下）に雀離寺の長老比丘と沙弥のエピソードが記載されているが、この雀離寺をシャヴァンヌはペシャワールのとし、ペリオはむしろクチャのとする。ペリオはその論拠に衆経撰雑譬喩の訳者が羅什であることをあげている。[8]

また義浄は大唐西域求法高僧伝（大正51、六中）でナーランダの「雀離浮図」にふれている。かれはこれをペシャワールの塔と混同しているらしい。この記事については後にもう一度ふれる。

さて、これほど有名な雀離の名を古人はどのように解していたか。実は殆どの文献がその意味を明かしていない。道宣（五九六―六六七）は前記続高僧伝の中で「雀離の名の由来はわからない」と述べている。義浄は大唐西域求法高僧伝の中で「次にこの西南に小制底あり。高さ一丈あまり。これ婆羅門が雀を執えて請問したところ。唐に雀離浮図というは、これ即ちこれなり」と記しているが、これはナーランダの小チャイティヤのことであつて、ペシャワールの雀離浮図のことではない。後者に雀に関する逸話は伝えられていない。

では現代の学者は雀離の意味をどう解釈しているだろうか。ビールは洛陽伽藍記の翻訳の中で雀離浮図を括弧つきで a pagoda with a surmounting pole と説明し、注で「雀離は雀を意味するが、しかしこれは śûla すなわち屋上の槍ないし三叉戟の音訳文字である」としている。[9]

ウォッターズはいくつかの解釈をあげたあとで、最も可能性のある解釈として、「雑色を意味し、一般に侏離と音訳される外国語」とみなす考えをあげている。かれによれば、この解釈が仏教建造物の素材である石材の色によく対応するそうである。[10]

シャヴァンヌは洛陽伽藍記の仏訳の中で雀離浮図を le stūpa du loriot (loriot=高麗鶯) と訳し、注で「この言葉は外国語の音訳文字かもしれない。高麗鶯の意味はないかもしれない」と記している。[11] レヴィはシャヴァンヌにならつて、カニシカ僧院を couvent 《du Loriot》と呼んでいる。[12]

ペリオは現代の学者の中では最も詳細に「雀離」の意味を論じ、それが意味文字である可能性を全く否定する。そして雀離 *Tsiak-lijẹ は *Čäkri のような外国語を、玄奘の「昭怙釐」*T'śiäu-γuo-lijẹは Čägüri のような外国語を音訳したものと考える。もちろん*Čäkri が時代とともにČägüri に変化したと考えるのである。それならばこの外国語は何語か。ペリオはクチャ・トカラ語 koutchéen-tokharien ではないかと考える。[13] この言葉は仏教と無関係に古く一度あらわれる。すなわ

ち一二七年に班勇と張朗が出合いの場所と決めていた爵離関（カラシャフルの近く）〔後漢書、巻七七〕がそれだという。[14] そして、この語の意味するところは「塔」であつて（？この所ペリオの論旨は明確でない）、それが関所の防御塔と仏塔に適用されたと推定する。クチャの言葉がペシャワールの塔の名に用いられたのは、カニシカが小月氏出身であるのと関係があろうという。

その後、欧米では雀離の意味についての新しい解釈は出されなかつたようである。一九七一年出版の Dobbins の The Stūpa and Vihāra of Kanishka I にはこの点に関して何の記述もない。日本の学者は欧米の学者の説を紹介するにとどまる。堀謙徳は雀離の意味について「異色を有し、云々」と述べているが、[15] 恐らくウォッターズの見解に従つたものであろう。足立喜六の『大唐西域記研究』には雀離浮図の名への言及はない。内田吟風は雀離を光頂 Sula、鶯雀 chūri に比定する諸説があることを述べている。[16] 前者はビールの、後者はウォッターズの説であろう。

水谷真成『大唐西域記』ではペシャワールの大塔に関しては雀離の名の解説はないが、クチャの昭怙釐伽藍には詳しい注がある。[17] そこではペリオの説のほかに、次のような説が紹介されている。「……現在もYagnobi, Ormuri等のパミール方言では『寺院』に当る語はCakka, Cuki, Sakekなどとよばれているようである。」

長沢和俊訳注『法顕伝・宋雲行紀』には特に雀離の解釈はない。面白いのは望月仏教大辞典がタクシラの Jaulian Stūpa に雀離塔の字をあてていることである。[18] 私にはこの比定の正否を判定する力がない。

さて、私自身が提案する解釈は、雀離はインド語の cakri の音訳文字ではないかということである。法輪 cakra を有するものがcakrinである。cakriはその合成語をつくるときの形と考えられる。たとえば Cakri-stūpa, Cakri-(mahā-) vihāra というようにである。

しかし、塔そのものにこの名を生みだすだけの十分な根拠が見出されるだろうか。私は偉大な王がつくつた塔が転輪聖王 Cakravartin の名を冠して呼ばれたのではないかと考えてみる。しかし、タクシラのアショーカ王の塔は Dharmarājikā と呼ばれ、[19] カニシカ塔は古くは雀離浮図またはカニシカ塔と呼ばれ、今日その遺址は大王塚 Shah-ji-kī-ḍherī と呼ばれるにとどまる。また、アショーカもカニシカも転輪聖王と呼ばれた様子はない。しかも「法輪を有するもの」cakrin と「法輪を転ずるもの」cakravartinとは概念が同じではない。

次にある種の仏塔の基礎工事にみられる、平面図が法輪状を呈する放射状の壁――タクシラのダルマラージカー塔とわれわれのカニシカ塔にその形跡がみられる――[20] を想起する。

しかし、巡礼者の目に触れぬそのような構造が塔の名になるとは思われない。

次に私が連想するのはアフガニスタンのカーブル近くのシェヴァキ村にある「チャクリ・ミナール」の名である。この塔は山上にあり、石製で、幢 stambha 型をなしている。「ミナール」は光塔を意味し、アラビア語系の言葉らしいが、塔そのものは仏教のものである。この塔については一九世紀にマッソンがスケッチを残し[21]、二〇世紀にはフーシェが「Minar-Chakri と呼ばれるのは塔の上にかつて輪（cākra）があつたからだろう」と述べている。フーシェの見解はアッカンおよびカルルに引きつがれている。この塔の写真は京大学術調査隊編「文明の十字路」（挿一一〇）や Artibus Asiae, vol. XXVII, 1964-65 (Fig. 48) にも出ている。この塔がいつ作られたか、また「チャクリ」の名がどのようにして伝えられてきたか不明であるが、これがアショーカ王石柱を模したものであること、もと法輪を有したことは間違いないだろう。

雀離浮図の形態は塔 stūpa 型であつて、幢型ではないが、これにも法輪があつたのではないかと考えてみる。しかし、古代の求法僧の文献で雀離浮図に関し法輪に触れたものがない。「金盤十五重」などというのがそれであろうか。カニシカ塔はスプーナーらによつて発掘されたが、上部構造は不明である。あるいは後世のヒンドゥー寺院であるプーリーのジャガンナート寺のシカラの頂上に見える法輪のようなものを想定すべきであろうか。いずれにしても、カニシカ塔の名は何らかの意味で法輪と関連していたのではないかと思われるが、いかがであろうか。

1　法顕伝（大正51、八五八中）

従揵陀衛国南行四日到弗楼沙国。仏昔将諸弟子遊行此国。語阿難云。吾般泥洹後当有国王名罽賦伽。於此処起塔。後罽賦伽王出世。出行遊観時。天帝釈欲開発其意。化作牧牛小児。当道起塔。王問言。汝作何等。答言。作仏塔。王言大善。於是王即於小児塔上起塔。高四十余丈衆宝挍飾。凡所経見塔廟壮麗威厳都無此比。伝云。閻浮提塔唯此塔為上。王作塔成已小塔即自傍出大塔南。高三尺許。

2　洛陽伽藍記（大正51、一〇二一上以下）

復西南行六十里至乾陀羅城。東南七里有雀離浮図。道栄伝云城東四里。推其本源。乃是如来在世之時与弟子遊化此土。指城東曰。我入涅槃後三百年。有国王名迦尼色迦。此処起浮図。仏入涅槃後二百年来果有国王。字迦尼色迦。出游城東。見四童子累牛糞為塔。可高三尺。俄然即失。……王怪此童子。即作塔籠之。糞塔漸高挺出於外。去地四百尺。然後止。王始更広塔基三百余歩。……道栄伝云。其高三丈。悉用文木為陛階砌櫨拱上構衆木。凡十三級。上有鉄柱。高三尺。金槃十三重合。去地七百尺。道栄伝云。鉄柱八十八尺。八十囲。金盤十五重。去地六十三丈二尺。施功既訖。糞塔如初在。大塔南三歩。……雀離浮図。自作以来三経天火所焼。国王修之。還復如故……道栄伝云。王修浮図。木工既訖。猶有鉄柱。無有能上者。……胡人皆云。四天王助之。……西域浮図最為第一。……在塔西北一百歩掘地埋之（＝珠網）。上種樹。樹名菩提。……宋雲以奴婢二人奉雀離浮図。永充灑掃。恵生遂減割行資。妙簡良匠。

以銅摹写雀離浮屠儀一軀……。

3　北魏僧恵生使西域記（大正51、八六七下）
復西南行六十里。至乾陀羅城。有仏涅槃後二百年。国王迦尼迦所造雀離浮図凡十二重。去地七百尺。基広三百余歩。悉用文石為陛。塔内仏事。千変万化。金盤晃朗。宝鐸和鳴。西域浮図。最為第一。

4　北史、巻九十七、西域列伝
《小月氏国の条》其城（＝富楼沙城）東十里有仏塔。周三百五十歩。高八十丈。自仏塔初建計至武帝八年（＝西暦五五〇）八百四十二年。所謂百丈仏図也。
《乾陁国の条》所都城東南七里有仏塔。高七十丈。周囲三百歩。即謂雀離仏図也。

5　Dobbins, K. W. : The Stūpa and Vihāra of Kanishka I, (The Asiatic Society Monograph Series, Vol. XVIII), 1971, p. 44.

6　Bailey, H. W. : Kaṇaiska, JRAS, 1942, pp. 18～21 (Dobbins, op. cit., pp. 44～45に再録)

7　Sachau, E. C. : Alberuni's India, Vol. II, p. 11. 〔Bailey, op. cit., p. 15 に原文とその翻訳があげてある。翻訳は次のとおり。And of their number was Kanik and it is he to whom is ascribed the *bihār* (=Skt. *vihāra*, monastery) which is in Purušāwar and is called Kanik-čait.〕

8　Pelliot, P.: Tokharien et Koutchéen, JA, Tome CCXXIV, 1934, pp. 81～82.

9　Beal, S. : The Mission of Sung-Yun and Hwei Sǎng to obtain Buddhist Books in the West.(518 A. D.)〔Translated from the 5tn Section of the History of the Temples of Lo-Yang (Honan Fu).〕(Buddhist Records of the Western World, Introduction) ciii.

10　Watters, T.: On Yuan Chwang's Travels in India, Vol. I, pp. 62—63, p. 207.

11　Chavannes, M. E. : Voyage de Song Yun dans l'Udyāna et le Gandhāra (518—522 p. C.), BEFEO, Tome III, 1903, pp. 420—422.

12　Lévi, S. : Le《tokharien B》, langue de Koutcha, JA, 1913, p. 336.

13　Pelliot, op. cit., pp. 86—88.

14　Ibid., p. 101f.

15　堀謙徳『解説西域記』、図書刊行会、昭和四十六年再刊、（大正元年初版）、一七九頁。

16　内田吟風「魏書西域伝原文考釈（下）」、東洋史研究、第三十一巻、第三号、昭和四十七年、七一頁。

17　水谷真成訳『大唐西域記』、平凡社、昭和四十六年、十五頁。

18　望月仏教大辞典、九八五中。

19　マーシャルはタクシラの Dharmarājikā 塔について、この名は法王としてのブッダの塔とアショーカ王によって建てられた塔の両者を意味しうるとしている。Marshall, J. : A Guide to Taxila, Cambridge, 1960, p. 102.

20　Marshall, op. cit., p. 103. Spooner, D. B. : Excavations at Shāh-ji-ki-dherī, ASI, Annual Report 1908—9. p. 48. ジャイナ教の塔にも同じものがある。Smith, V. A.: The Jain Stūpa and Other Antiquities of Mathurā, plate I, III.

21　Wilson, H. H.: Ariana Antiqua, 1841, p. 114, plateIX.

補注　Karlgren : Grammata Serica によると中古音。雀 1122a, tsiak　離 23f, lijię　梨 519h, lji　昭 1131m, tśjäu　怙 49x, ɣuo　釐 9791, lji

（東海大学助教授）